

「恍惚の日日」 (第八回きみまち恋文大賞) 西岡 孝

記憶はおろか、身体の自由も、言葉の交流さえも失なって、かれこれ十年以上ほとんど寝たきり状態のあなた。過去と現在との境も、自分と他人との見分けもつかないままあなたは、音程のずれた小学唱歌をつぶやきながら、ぼう洋とした花野の中を、一人とぼとぼとさ迷い続けているのだろうか。

「起きあがりたい」「寝返りしたい」「おむつを替えたい」、そんな時のあなたは、空ろな眼で、「アーアー」とか「ウーウー」とか言葉にならない声を出しながら、懸命に私に訴えかける。それがあなたに残されたたった一つの、かなしい意志表示のしかたになってしまったね。

そんなあなたの、棒のように硬直した肢体に、日に何度となく、慣れた手つきでおむつを当ててやる私。ときおり、その手のひらにあなたは、ちよろちよろと熱い尿を洩らす。そのような姿をまのあたりにしながらあなたを介護していると、いたわりとかやさしさとかの本当の意味が、あなたが病気になる前よりも、かえって深まったように思う。

今日もまた、あなたが呼びかける声の抑揚や高低、何げないしぐさやそぶり—— そんなかすかなシグナルから、あなたの訴えを読みとる。そして、こなごなに砕けてしまったあなたのかけらを、一つ一つつなぎ合せながら、たとえ一方通行のコミュニケーションでもいい、私はあなたとの心温まるふれあいを求めているのです。

今のあなたの、この安らかな恍惚の日日は、過去の苦難に堪えたあなたの生涯に対して、神様が授けて下さった、癒やしの恩寵なのかも知れません。にもかかわらず私は、敢えて、もとのあなたに戻ってほしい、と願うのです。私の手を胸の高みに導きながら、「わたしの潮騒を聞いて」とささやいた、遠い日のもとのあなたに。月に何度となく、水茎の跡も美しい手紙をくれた、遠い昔のもとのあなたに、早く戻ってほしいのです。

※ 長い年月にわたって介護して来た、痴呆症の妻への思いを綴ったもの